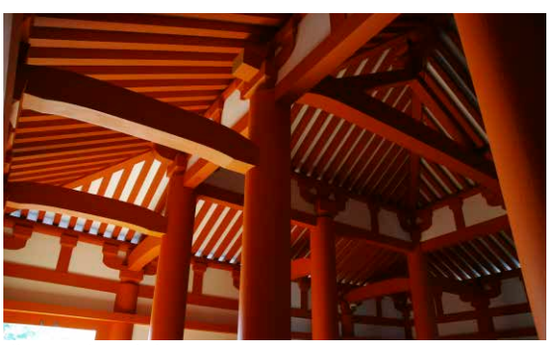
磐梯町 慧日寺復元金堂内 薬師如来坐像 復元プロジェクトについて

はじめに

平安時代初め、磐梯山の大噴火直後に会津を訪れ、その山麓に慧日寺（えにちじ）を建立した徳一という南都の僧がいました。彼はその後、湯川村の勝常寺や、会津から筑波山にかけて多くの寺院を創建したと伝えられています。東大寺もしくは興福寺で修行を積み、当時勢力を増しつつあった天台宗の最澄と「三一権実論争」とよばれる激しい宗論を闘わせたことでも知られ、真言宗の空海に「徳一菩薩」と称されるほどの傑僧でした。徳一により開かれた慧日寺はその後大いに栄え、文化６年（1809）の『新編会津風土記』には「徳一当寺に住せしより以来相続て寺門益繁栄し、子院も三千八百坊に及び、数里の間は堂塔軒を比し、甍を並べ壮麗言計なりしとぞ。されば会津四郡の地大方は寺領なりしに…」と記されるほど、会津地方の文化熟成に大きな影響を与えました。しかし幾度もの火災・戦災を経るうち次第に寺勢は衰え、明治初頭の廃仏毀釈によりついに廃寺となりました。

福島県磐梯町では、慧日寺跡の発掘調査を行い、金堂および中門を復元するなど博物館施設として整備してきました。東京藝術大学では、平成27年から始まった周丈六薬師如来坐像（像高約２ｍ）の復元制作へ全面的に協力し、文化財保存学専攻保存修復彫刻研究室が中心となって制作を続けてきました。平成30年７月30日、いよいよ完成を迎えたこの一大プロジェクトについてご紹介いたします。

冬の慧日寺復元金堂



復元金堂の内部

史跡慧日寺跡　全景

実際の制作のながれ

□ 像の大きさの検討

はじめに、復元金堂に合う薬師像の大きさを決定しました。CG を使って検討したところ、記録にのこる丈六像（1 丈 6 尺、坐高で約 2.4 m）では堂宇に対して大きすぎ、周丈六（丈六像の約 75%）が適切であるとわかりました。さらに樹脂で造った模型を金堂内に実際に配置し、像の収まり具合などを確かめました。

3 DCG による像高検討

樹脂模型の制作

現地金堂内での検討会

塑造原型の制作

□ 造形の検討

像の大きさが決定し、続いて具体的な造形の検討に入りました。4 分の 1 サイズの塑造で造形の推敲を重ね、同寸の木彫雛形を制作しました。さらに検討委員会の助言に基づき修正を加えました。

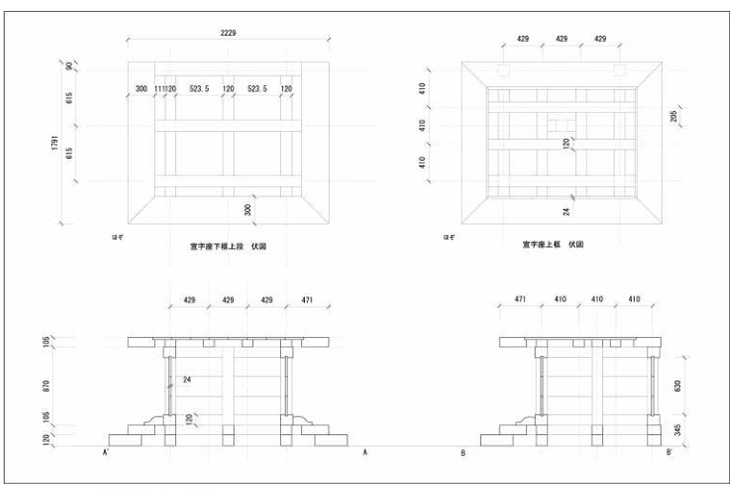
藝大での検討委員会

木彫雛形の制作

□ 台座の制作

慧日寺薬師如来の時代的背景から、台座は裳懸のついた宣字座であった可能性が高いと考えられます。宣字座とは広い上框と下框に細い腰框を挟んだ、「宣」の字に似た形の台座を指します。その構造は巨大な薬師如来像の重量に耐えるため頑丈なものとなっています。設計は東京藝術大学大学院・保存修復建造物研究室が担当し、実際の制作は気仙大工の技術を持つ、村上製材所（陸前高田）で行いました。

宣字座本体裳懸や反花など、彫刻部分は台座本体とは別に制作し取り付けました。



宣字座の図面（部分）

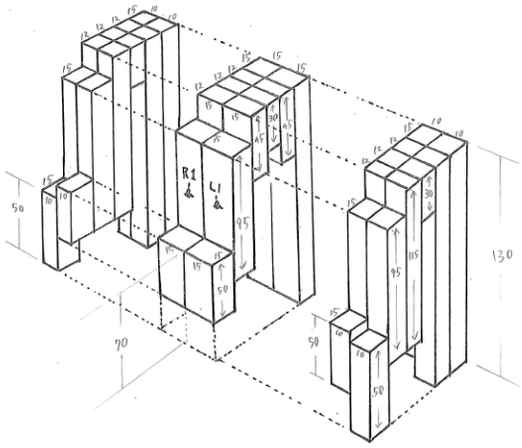
宣字座の搬入

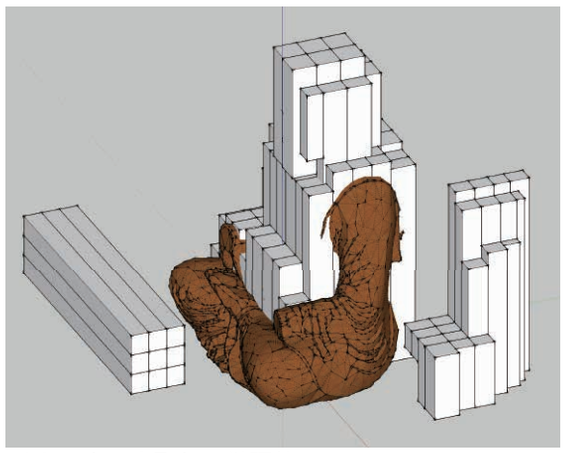
宣字座の組み上げ

裳懸の仮組み

□ **木取り**

造像当時の慧日寺薬師如来像は、平安時代初期という時代から見て巨木から像のほとんどを彫り出した一木造であったと考えられます。しかし現在ではそのような巨木は極めて貴重であり、彫刻制作に用いることはできません。そこで今回の復元制作では、反りの少ない良質な天然木曽ヒノキを用いた寄木造を採用しました。15cm 角の材を中心とし、本体だけで 100 本以上の材を使用しました。内刳りとして内部を空洞にする部分は無駄になるため、CG も用いてその部分を省いた木取りを行いました。


木取り設計図


CG による木取りの微調整

□ **鑿入れ式**

平成 28 年 7 月 22 日、薬師如来像の鑿（のみ）入れ式を、東京藝術大学の体育館で行いました。かつて仏像制作にあたっては、斧始め、刀始めなどの儀式が行われていたことが文献から知られていますが、その全貌は明らかではありません。文献に残る記述を取り入れながら、現代風に「鑿入れ式」として行い、参加者全員が鑿をふるいました。

鑿入れ式

□ **木彫作業開始**

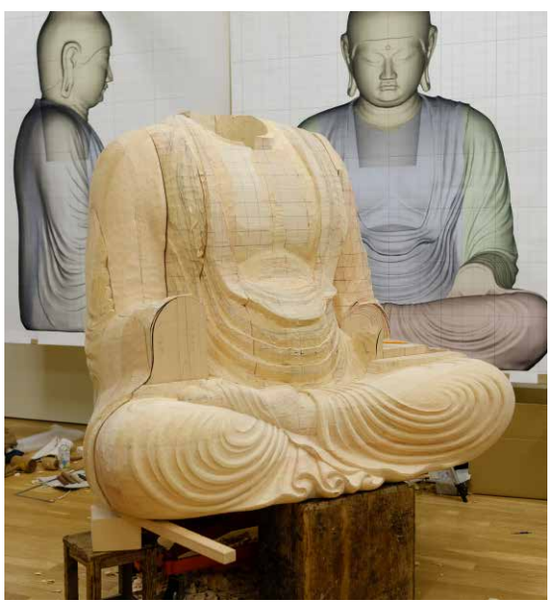
はじめに 100 本以上ある角材を数本ずつの板材にまとめ、それぞれに図面を転写しました。この図面に基づいて粗取り・内刳りを行い、少しずつ軽くしながら彫り進めていきます。大量に必要な螺髪も同時に制作を進めます。

仮組みした薬師像本体の用材

鋸入れ

図面転写

粗取り



中彫り

一つ一つ螺旋を刻んだ螺髪

小道具での仕上げ

主な彫刻道具

木地仕上げがほぼ完了した状態

□ **光背の制作**

光背は高さ３ｍにもなります。化仏や光脚、装飾は別材で造り、それぞれ漆で仕上げます。光背の意匠決定にあたっては、現在恵日寺に安置されている再興像の化仏（江戸時代）の調査も行いました。

光背地板の制作

光脚の制作

光背の宝相華

化仏の制作

木地仕上げがほぼ完了した化仏

化仏台座に取り付ける光背

化仏台座に取り付ける金属の装飾

2017 年 磐梯とくいつ藝術祭での公開制作

慧日寺薬師如来坐像復元プロジェクトと同時に、東京藝術大学では磐梯町と協力して企画展示を毎年行ってきました。第 3 回磐梯とくいつ藝術祭では、磐梯町駅前に整備された分室工房において 2 ヶ月間に渡り公開制作を行い、のべ 6,147 人の方々にお越し頂きました。

磐梯町駅前の工房

駅前工房での記者発表

駅前工房での公開制作

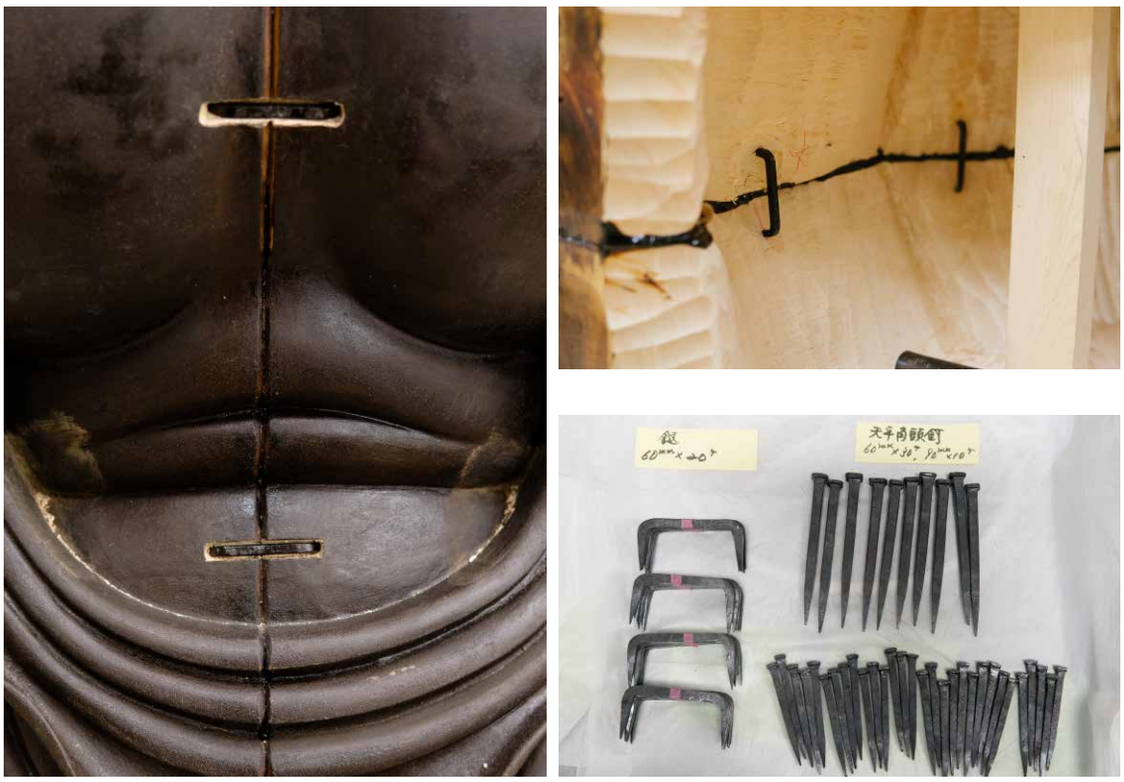
内堀雅雄福島県知事の視察（駅前工房）

各部材の漆工

薬師像・光背・裳懸・反花は、本堅地仕上げとしました。まず全体を生漆で固め、材と材の接合部には切り込み（薬研彫り）を入れた上で木屎漆を充填し、さらに全体に布を貼って強化します。
錆漆（漆＋砥粉）などで下地をつくり、何度も何度も研いで表面が平滑になったら、呂色漆を塗って更に艶やかな仕上げにします。

□ 薬師像の漆工

薬師像の木地固め



和釘・鎹による緊結

薬師像への布貼り

薬師像本体の錆下地工程

ほぼ研ぎ上がった薬師像

薬師本体の呂色塗り

呂色漆を塗った薬師像

反花の木屎充填

裳懸の呂色漆塗り

光背の錆漆研ぎ

光背の錆漆研ぎ

光背の呂色漆塗り

光背装飾の錆漆研ぎ

光背装飾の錆漆研ぎ

光背装飾の呂色漆塗り

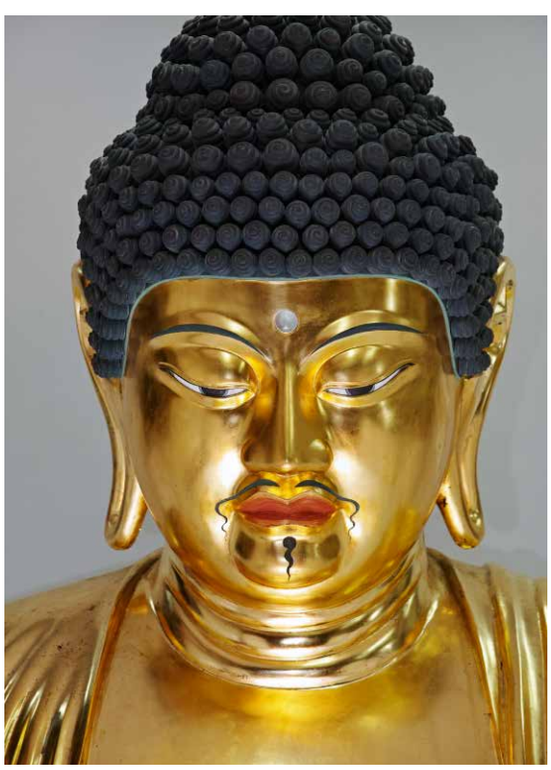
漆箔

滑らかに研ぎ上げた表面に少量の漆を擦り込み、金箔を押していきました。金箔は五毛箔と呼ばれる高品位なものを用いました。

光背・台座・化仏の漆箔

彩色

今回の復元制作では最終的には古色仕上げとしましたが、復元にリアリティを持たせるためいったんは造像当初のように彩色を施しました。群青･緑青･朱など天然の岩絵の具を用い、光背化仏にも同様に彩色しました。



天然顔料による彩色

磐梯町への薬師如来像の搬入

第3回とくいつ藝術祭以降、光背や台座の制作は磐梯町で制作を続けていましたが、薬師如来像は上野に戻り制作していました。平成30年6月26日、すべての部材を磐梯町駅前工房へ搬入しました。

駅前工房への搬入

古色付け

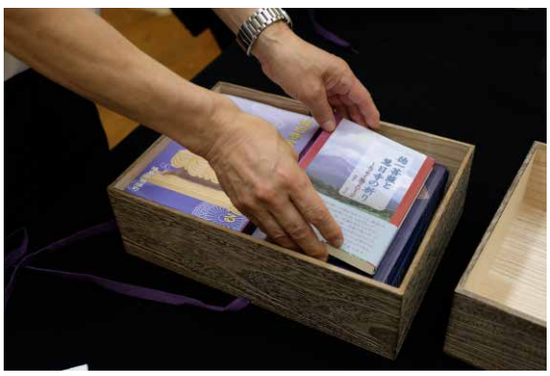
制作されたばかりの仏像は鮮やかな彩色や金箔が施されていますが、現代では馴染みが薄いものです。また古像の復元という事業の性格上、今回の制作では長い時間を経て古色を帯びた姿を再現しました。漆をはじめ、さまざまな染料・顔料を用いています。

漆箔箇所の古色付け

木地部分の古色付け

「制作趣意書」納入式

金堂への搬入を前に、薬師如来像の像内に「制作趣意書」をおさめました。今回の復元プロジェクトの経緯や関わった方々、慧日寺薬師如来像に関わる著作などをおさめ、厳重に封印しました。



納入式の様子

復元金堂内への設置

平成 30 年 7 月はじめ、完成が近づいた薬師如来像を慧日寺復元金堂へ搬入し、一般公開が始まるまでのあいだ調整作業を続けました。

完成披露式

平成 30 年 7 月 30 日、慧日寺金堂において完成披露式が行われ、本学澤和樹学長が記念ヴァイオリン演奏を行いました。この復元プロジェクトは、自治体による積極的な文化財の保護・活用と、地元に拠点を置く企業による理解とサポート、さらに本学がこれまで培ってきた技術や知見が揃うことによって実現しました。1200 年の時を超えて復元された薬師如来坐像は、今後地域の方々の心の拠り所となり、また仏都会津の観光拠点として、東北復興の一助ともなりうるでしょう。